浅き夢見し

遊戯(Yuge)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浅き夢見し

【Ｎコード】
Ｎ４９０５Ｉ

【作者名】
遊戯（Ｙｕｇｅ）

【あらすじ】
前世の記憶を夢に見る者の話しは、お耳にされた事がございましょう？　されど、生と死の間（はざま）に立ったこの男が見た、ほんの束の間、走馬灯の様に脳裏を駆け巡った夢は、それとは少し違う様で…。男は、抱えた心の闇に一筋の光明を得た模様にございます。

夏は海水浴客で賑わうこの砂浜。
しかし晩秋の北風吹く夕暮れの今、居るのは駐車場の石段に腰掛けた僕ら二人と大きな犬を連れた人が遠くに一人だけ。

暗い紫の雲の裂け目から夕日が柔らかな光の手を伸ばし、君の頬を撫でて艶やかに見せる。
君は瞳を輝かせて微かな笑みさえ浮かべ、高くうねる海に沈み行く朱色の太陽の破片を見送っていた。

ふと君が顔を向けた。
その綺麗な横顔に魅入られていた僕に。
潮風が揺らす長い黒髪を、しなやかな指先で耳に掛けて押さえたまま、二重の愛くるしい目を眩しげに細めて頬を緩めた。

突然別れを告げたきり、君は何も言わない。
これからの二人の事を何も言わない。
また逢おうね…。とも、今日が最後…。とも…。

無言の君はただ微笑む。

だから僕は何も聞けない。
君の笑みが穏やかで優しさに満ち溢れているから。
また逢えるか？　とも、僕らは終わりなのか？　とも。
気の利かない問い掛けで、その笑みを失いたくなくて…、無言の僕は、ただ君の言葉を待った。

僕らはいい関係だったね。喧嘩なんてした事もない。そして本音を語り合う事も。
いつも押し殺してしまう互いの心を、自然と理解し思い遣り労り合えた。
まるで長年連れ添う老夫婦の様な、ゆるぎない当たり前の信頼で繋がれている。と僕は思っていた。

来た時と同じ、海岸通りを走る車内に会話は無く、君のお気に入りの女性ボーカルの熱唱も今日は白けて耳障りに聞こえる。
僕はこの手に握るステアリングを右一杯に切って、ガードレールを突き破り冷たい海に共に落ちる瞬間を何度も想像していた。

やがて君が車を降りる時が来て、俯いた君はたった一言、僕の目を見ずに言った。

「いいお医者様になってね」

君は知ってた筈だ。
僕はいい医者になんてなれっこない。
新しい命を宿した君の変化にさえ気付いてあげられなかった。

優しい君は、小さな命も僕の夢も救おうとしていた。
未熟な僕の前から姿を消す事で。

ところが、そんな君の謀(はかりごと)には、ほんの一つだけ大きな誤算があった。
僕がもう君無しでは居られなくなっていた事。
いつからだろう…、僕の夢は君の笑顔が傍に在ってこそになっていた。

改札を通って笑顔で手を振る君を、僕は駅の入り口に佇(たたず)んで虚ろに見ていた。
ゆっくり手を下ろした君が背を向けて角を曲がり、その見慣れた姿は視界から消えた。
次の瞬間…、僕の中でつまらない怒りの意地の糸が切れ、突然の凄まじい後悔と焦りにハッとした僕は、背中を誰かに突き飛ばされた様に駆け出して君を追った。

今日一日、穏やかな笑みを絶やさなかった君は、最後の最後、微かに寂しげな表情を過(よ)ぎらせた。まるで言葉の出ない僕を責める様に。

新幹線のホームの一番端、しゃがみ込んで嗚咽(おえつ)を噛み殺す君がいた。
愚かしい程意地っ張りだった僕は、悲しい程強がりで脆(もろ)い君の、涙に濡れた笑顔をきつく胸に抱きしめた。

「行くな…。やっと巡り逢えたんだ、離すもんか…」

大きな息を一つついて、私はゆっくり目を開けた。
晴れ渡る晩秋の高い空の下、風に波打つ金色の薄(すすき)の原の向こう、遠くに見える赤と黒の無数の幟旗(のぼりばた)が、地を舐める様にうごめきながら近づいてくる。

私は右手を伸ばして純白の采配を高々と掲げた。
ピンと張り詰める冷たく澄んだ緊張感と固唾を飲んで待つ静寂…。
次の瞬間。
風向きが変わり、鳥の大群が羽音を轟かせて一斉に林から飛び立つ。
私は胸一杯の息を腹の底から一気に吐き出した。

「行けえぇぇぇぇ！！！」

「うおぉぉぉぉ！！！」

地を振るわす程の雄叫び、地鳴りと土煙りが沸き上ぼる。
放物線を描いて飛んで来る矢を幾度も大太刀で薙(な)ぎ払い、私も敵に向けて馬を駆った。

逃げる背中を馬で蹴散らし、突き付けられた槍を叩き切り、馬上から身を乗り出して敵を一刀両断する。
ふと敵方の騎馬武将と目が合い、私は不敵な笑みを見せて馬を蹴り、正面から全速力で突き進んだ。
奴は怯んで背を向け馬を走らせたが、時既に遅し、私は追い越しざまのその背中に太刀を突き刺し、奴を馬から蹴落とした。

やがて私の馬も傷つきいななき暴れ狂い、私はその背に立ち上がるや否や刃を振り上げて敵の頭上目掛けて飛び降りた。

蹴り倒したその首をすかさず横一文字に切り裂き、飛び散った返り血に一瞬顔をしかめる。
背後に迫る敵には、逆手の太刀を後ろ手に突き刺した。
前のめりに倒れ伏した敵の手から太刀を取り上げ、両手に刃を握り締めた私は、標的を求め物色する様に辺りを見回す。

もう止まらない。
全神経が最高潮に研ぎ澄まされ、限界を超えつつある精神の前で、理性はもはや風前の灯となっていた。
『斬る手を止めたら殺られる！』
その脅迫観念のみに身体が支配されているのだ。

顎に滴る程浴びた返り血が、目にしみて視界を歪める。
それは太刀を揮う手絶え間ない私の熱い涙を呼び起こした。

瞑想の時、瞼の裏に見た女性の笑みが恋しい。
平穏で温かい雰囲気の中の優しげな君…、私の子を身篭っている。
君に逢えるのはいつの事だろうか…。

間違い無いのはただ一つ…、私は今、地獄に生きている。
人の命を奪って生き延びている。

『いいお医者様になってね』

君は確かにそう言った。
今は血にまみれたこの忌まわしい手が、人の命を救える時が来るのだろうか。
笑顔の君を抱きしめる時が来るのだろうか。

だとしたら…、そうであってくれるのならば…。
君は笑顔で待っていてくれ。
私はこうして、向かう敵襲い来る敵を斬って倒しながらも一歩ずつ
確実に進んでいる。君に向けて。
精一杯の今を生きている。

私の生きるこの闇の時代が、君の住む泰平の世の礎(いしずえ)になっているの
だとしたら…。
多くの犠牲の向こうに君の世界が在るのだとしたら…。
私は今出来る事に命を尽くそう。
屍(しかばね)の山を乗り越え、生まれ変わって君に逢いに行こう。
何一つ無駄な事など無いと信じて…。

いつの間にか雲は茜色に染まり、黄金(こがね)色の光りを放つ朱色の太陽が
稜線に触れ様としていた。

私は刃の切っ先をその鼻先に突き付け敵の大将を跪(ひざま)ずかせた。
そして、彼の憎しみ込めて見開いた血涙(けつるい)絞る赤い眼を見据えたまま、
太刀を両手で握り直し間髪を容(い)れずその首を跳ね飛ばした。
首級(しるし)を燃える様な夕焼け空に高々と掲げ上げる。

「御大将殿、討ち取ったりぃぃぃ！！！」

「おおぉぉぉ！！！」
「嗚呼ぁぁぁ…」

傷つきながらもの歓声と絶望の悲痛な叫びで一つの地獄が終わった。

しかし既に、次の地獄はそこまで来ているのだろう。

私は沈みかけた夕日に血まみれの顔を照らされながら呟いた。

「日の光りは何も変わらぬ……、君もどこかで見ているのであろう……？」

いずれ逢える…、後の世できっと…。
そしてこの手で君を抱きしめたら、その時は…
死んでも離すものか…。

浅き夢見し
Ｆｉｎ.

小高い丘の上の本陣へ戻ると、我が殿はうつらうつら船を漕いでおられた。
眼下に広がる草原での我らの奮闘も恐らくご覧ではなかったのだろう。

片膝ついて頭を垂れた我らに、慌てて姿勢を正され頷きおっしゃった。

「あっぱれじゃ…、大儀であった、誉めて遣わす」

威厳ある態度を装っておられるが、そのお口元にはよだれの痕が見て取れる。

私は数日前の同輩らの言葉を思い出していた。

『殿は全て主(ぬし)に任せきりで、ご自分で采配を振られた事も無いではないか！　殿を討て…、下剋上を果たすのじゃ！　皆、主に味方致すぞ！』

労多くして功少ない現状に憤(いきどお)りを感じている者は少なくない。
仲間割れをしている時ではないと、彼らを何とか宥(なだ)めすかしていた私の我慢にも限界がある。

満足げな笑みの後、大きな欠伸(あくび)をなさる殿を、頭を垂れたままの私は冷めた目線だけを上げて睨む様に見ていた。

次の地獄は…、謀反の時かもしれない…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4905i/

浅き夢見し

2010年10月28日05時39分発行